



俺と妻の歪んだ愛

「ひっく、う、うう……っ！」

「いい加減、飲みすぎだぞ。また今度話を聞いてやるから今日はここまでにしとけよ」

「だってだって！僕はまだ妻のこと大好きなのに……なのに、あんな軽薄そうな相手と……っ！」



「うう……先輩。僕は……僕は、どうすればよかったんですか……っ！」

「はあ……。まったく仕方ない奴だな。あと少しだけ付き合ってやるよ」

絡み酒をしてくる後輩に付き合い
コップに注いだ酒を呷る。

愛する人を寝取られたこいつには同情するが
自分の悩みも解決していないというのに後輩の
愚痴に付き合わされる身にもなって欲しい。

飲んだくれている後輩を見ておもわず
嘆息を漏らしてしまう。



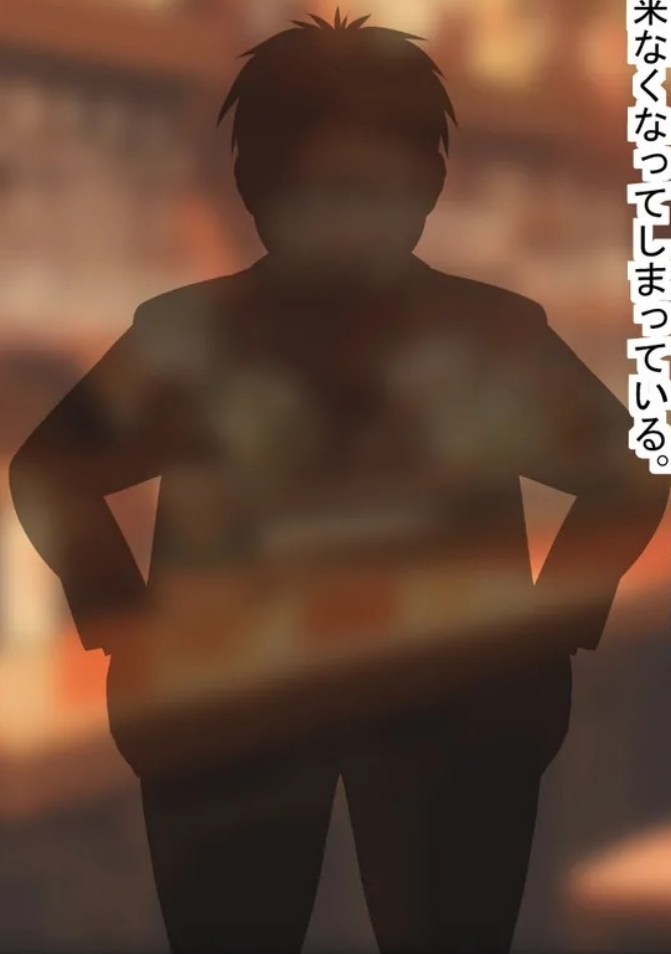
そう俺には解決しなくてはいけない悩みがある。
ある意味ではこの後輩とは正反対の悩みが……。

ED、勃起不全、インポ。呼び方はそれぞれ
あるが、要は勃たなくなってしまったのだ。

結果、俺と妻はお互い愛し合っているのにも
かわらず、もう半年以上も性行為が満足に
出来なくなってしまうている。

妻の恵も色々と協力してくれるが、
それでも一向に治る兆しが見えず
手をこまねいている現状だ。

そんな折、何度も同じ話を繰り返されれば
さすがに誰だって辟易してしまうだろう。



（……けど、自分の愛している人が他の男に抱かれるなんて辛い事なんだろうな）

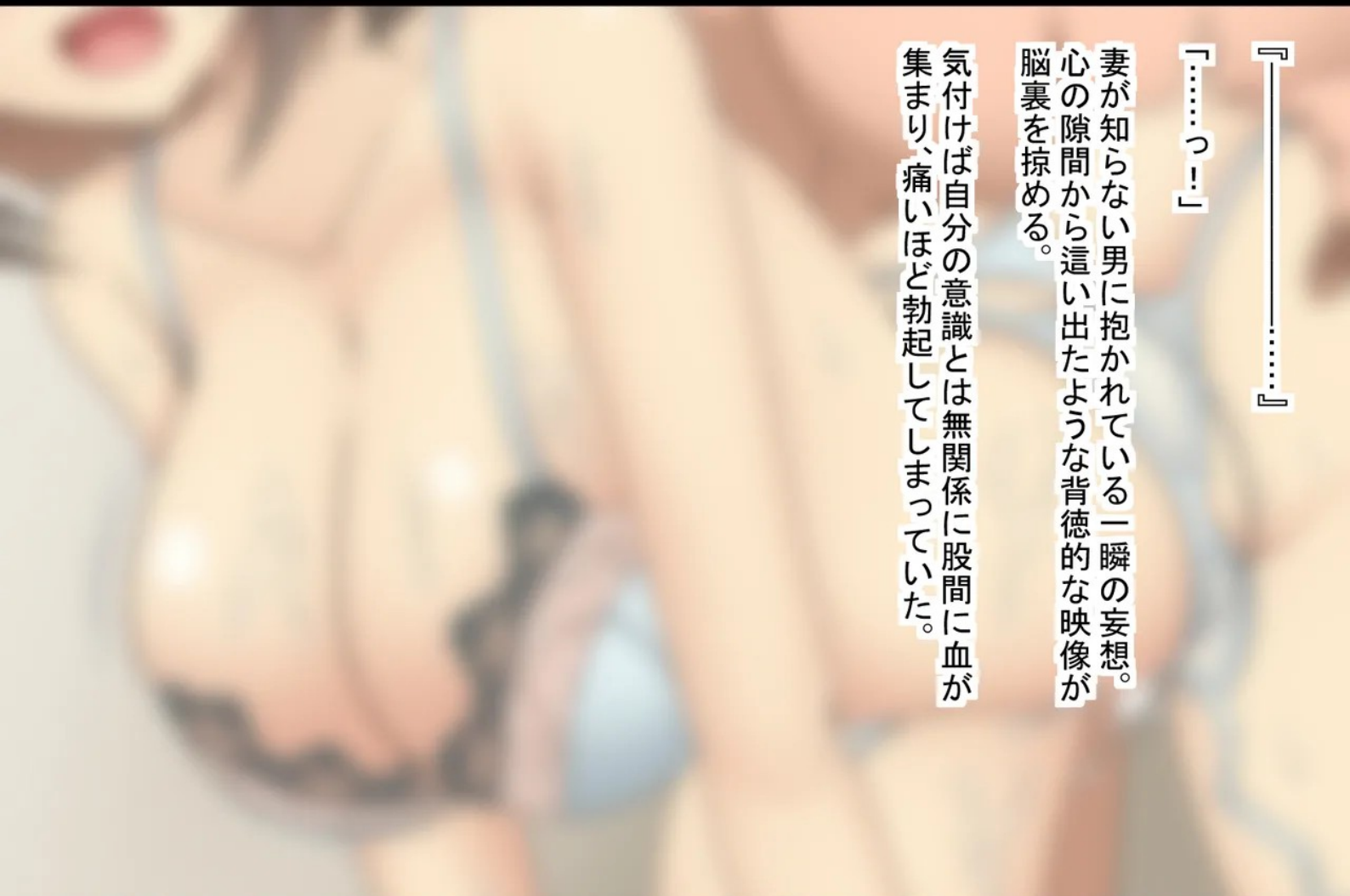
（もし俺がこいつの立場だったら——）



「……っ！」

妻が知らない男に抱かれている一瞬の妄想。
心の隙間から這い出たような背徳的な映像が
脳裏を掠める。

気付けば自分の意識とは無関係に股間に血が
集まり、痛いほど勃起してしまっていた。



「……はあ」

唐突に勃つようになったあの日から俺は『普通』の夫婦生活を送れるようになった。

ただ、妻も喜んでくれ、再び愛し合っているというのにどうしても気持ちが悪え切らずにいる。

……いや、理由はわかってる。

あのとき脳裏を掠めた映像が頭から離れにくれず、考えないようにしようとするほど、むしろ意識してしまうのだ。

まさか自分にこんな性癖があったなんて思っすらいなかった。

「あの、安彦さん。顔色が悪いようですけど、どうかしたんですか？」

「ん、ああ。大丈夫だよ。ちよつと考え事をしていただけだから……」

「……それ、嘘ですよね？」

「安彦さんが何かに悩んでいることなんて顔を見ればわかります。だって私は貴方の奥さんなんですよ」



「……っ！」

どうやら察しのいい妻には俺の嘘など通用しないようだ。

だが伝えるわけにはいかない。自分以外の男に抱かれて欲しいなどというこの歪んだ性癖を。

「本当に大丈夫だよ。それよりも、もう遅い時間だし寝ちゃおうか」

話を打ち切ろうとする俺の手を握り、それを引き止められる。

「貴方が何に悩んでいるのかまでは私にも分かりません。けど、悩みがあるのなら教えてください……何でも言っただけいい……」



「私は貴方の辛さや苦悩も共有したいんです」

「……っ！でも」

口に出せば嫌われる。

いや、嫌われるくらいならまだマシな方だ。
最悪嫌悪され捨てられてしまいかもしれない。

そんな事になるくらいなら、これからも
この呪いのような性癖に蓋をし、押さえつけ
たまま生きていく方がずっとましだ。

目を逸らし口を紡ぐ俺に彼女は優しく
あやすように語り掛けてくる。



「もし話したくない理由が私に嫌われるかもって怖がつているのなら大丈夫ですよ」

「何があっても私は貴方を嫌いにならないし。側を離れるつもりもありませんから」

彼女の言葉に胸に突っかかっていた何かが取れ
気付けば俺は自分の振じり曲がった性癖を吐露
していた。



「……っ」

「……」

俺の性癖の告白からどのくらい
時間がたってからだろうか。

話を聞き終え黙り込んでいた妻は、沈黙が支配
していた空気をかき消すように大きく深呼吸を
すると。何かを決意した瞳で見つめ返してきた。



「わかりました。任せてください」

「……え？めぐみ。お前、何言ってるのか？」

「はい、解っていますよ」



「正直最初に聞かされた時は驚きました。すごく、すごく驚きました」

「でもそれが安彦さんの望みなんですよね。なら、大丈夫です。安彦さんのして欲しい事なら私はなんだって受け入れられますから」

俺の性癖を無理やりにも受け入れようとしてくれている妻の痛々しい笑顔。

大切な人をこんなにも傷つけてるというのに、これからの事を妄想してしまった俺の股間はち切れんばかりに硬く膨らんでしまっていた。



変な相手に当たらないようにそれ専用の掲示板で募集した男と今日、妻は会いに行っている。

そう、俺の望み通りに。

……妻が出かけてからどれくらいの時間が経過してからだろうか。

不安と興奮の入り混じったモヤモヤとした気持ちを抱きながらも待っている、スマホに『終わったので帰ります』と連絡が入ってきた。

時計の秒針がやけにはつきりと聞こえる。時間の進みが遅く感じる中。リビングのソファアーの上で俺は彼女の帰りを今か今かと待ちわびた。

「……あ」

ガチャリと玄関の開く音が聞こえた。

直ぐにでも出迎えようとしたが膝が震えてしまい、立ち上がるのが遅れてしまう。

どうすればよいのかも分からずうちに時間は待ってもくれず、情けない姿で彼女と対面してしまった。



「あ……♡待っていてくれたんですね、安彦さん」

どうすればいい。…なんて声を掛けよう。

そんなことを考え、オタついてしまう俺に彼女はいつもより艶のある顔で微笑み返してくる。

「……。お、おかえり……。恵、っ」

「はい、ただいまです♡それと、これ……。安彦さんのご希望の物ですよ♡」



顔を火照らせた妻に動画データの入ったフラッシュメモリを手渡される。

『お風呂に入ってきちゃいますから先に見えていいですよ♥』と耳元で囁かれた。

その言葉に俺は居ても立っても居られずに寝室に駆け込むと直ぐさまにパソコンを起動し息を荒くしながら動画の再生を始めた。



● REC

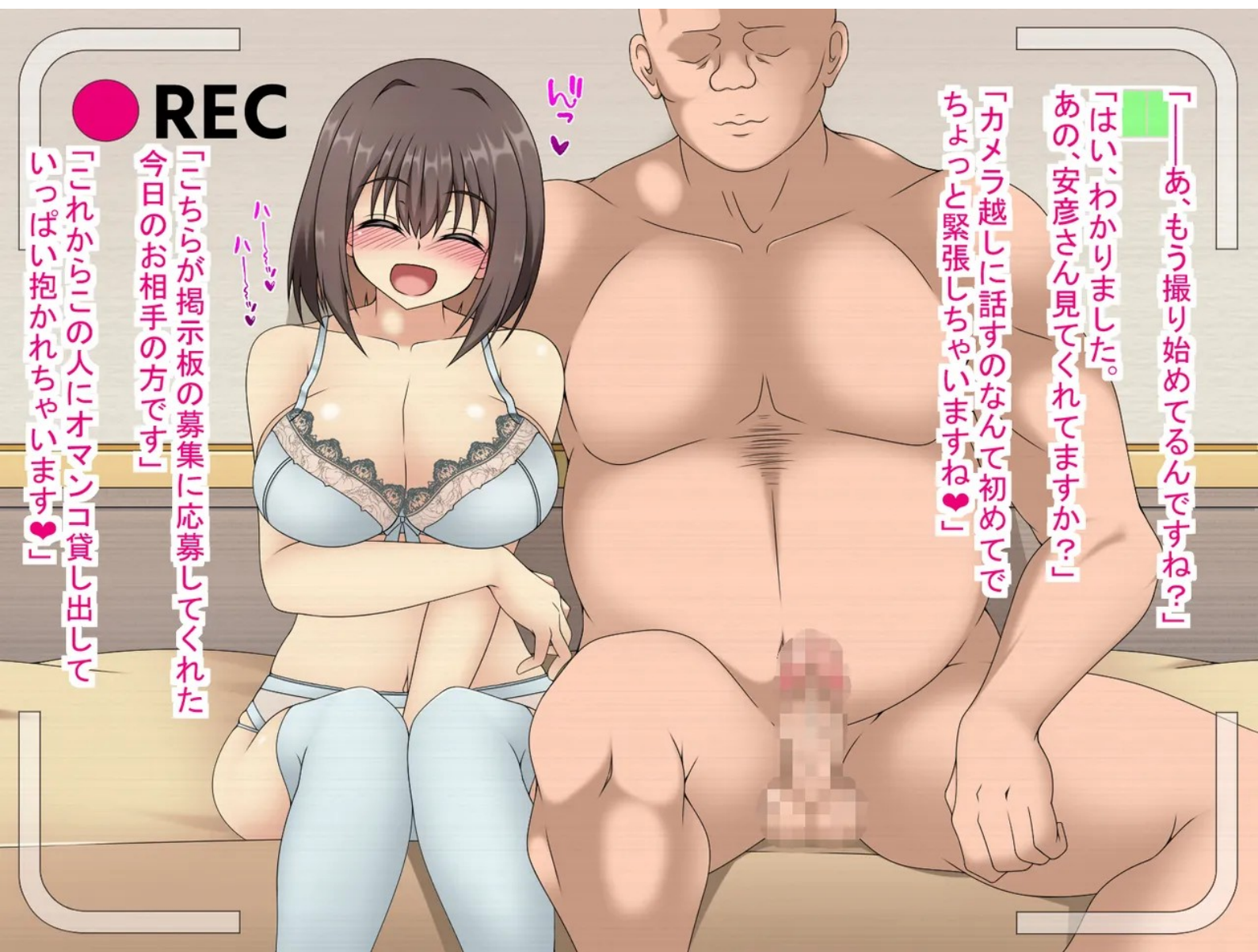
「これからこの人にオマンコ貸し出して
いっぱい抱かれちゃいます♥」

「こちらが掲示板の募集に応募してくれた
今日のお相手の方です」

ハ〜♥
ハ〜♥

ん〜♥

「あ、もう撮り始めてるんですね？」
「はい、わかりました。
あの、安彦さん見てくれますか？」
「カメラ越しに話すのなんて初めてで
ちょっと緊張しちゃいますね♥」

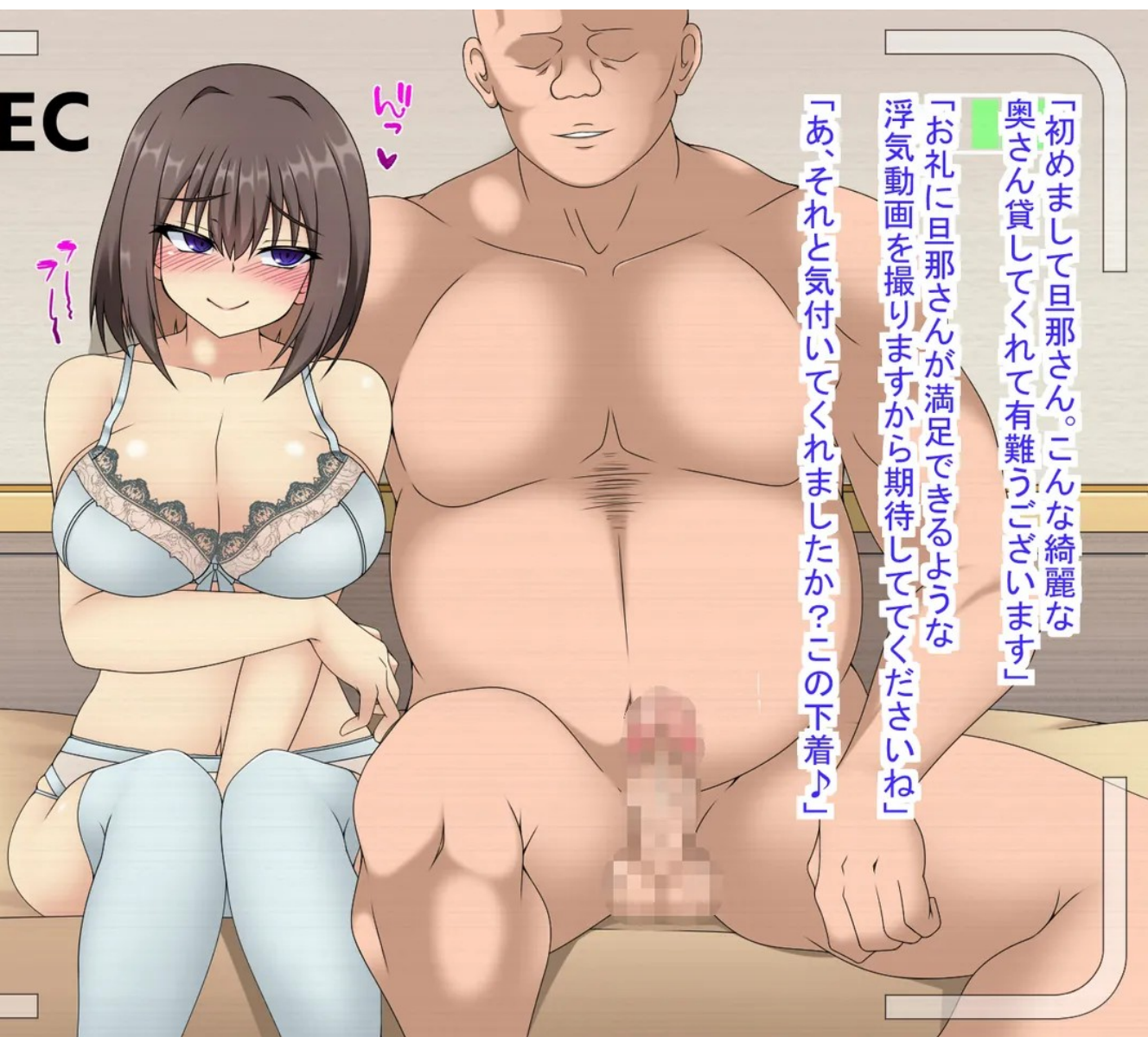


● REC

「初めまして旦那さん。こんな綺麗な奥さん貸してくれて有難うございます」

「お礼に旦那さんが満足できるような浮気動画を撮りますから期待してくださいね」

「あ、それと気付いてくれましたか？この下着♪」



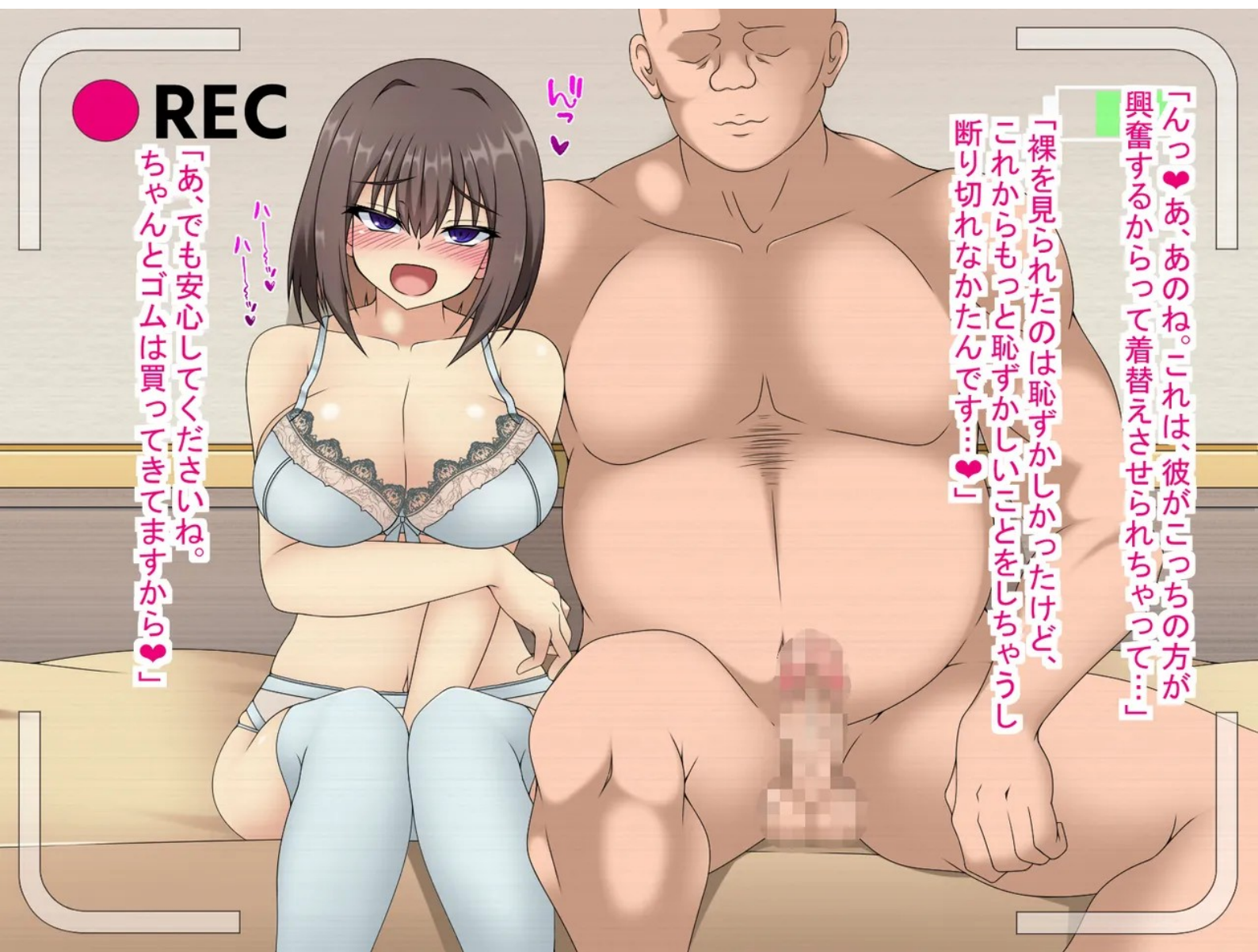
● REC

「あ、でも安心してくださいね。
ちゃんとゴムは買ってきてますから♡」

ハ〜♡
ハ〜♡

ん〜♡

「んっ♡あ、あのね。これは、彼がこっちの方が
興奮するからって着替えさせられちゃって…」
「裸を見られたのは恥ずかしかったけど、
これからもっと恥ずかしいことをしちゃうし
断り切れなかつたんです…♡」



「でも。わた、し…♡あなた以外の男性に
こうやって触れられるの初めてで……んっ♡」

「ふう、ふう…っ♡ふあっ♡は、あっ♡
「ごめんなさい、こんなに感じちゃって…」

あゝ
うん

「んっ♡はあっ♡いま、喋っているからまだダメ、ですよ…っ♡あう♡あ、あっ♡」

「そんな、ねっちこく触っちゃ、やだあ…♡」

● REC

うう...

うう...

あーっ
うう...

「ほら、感じてばっかりいないでちゃんとカメラに向かって報告しないと」
「はうっ♡...んあ、ああっ♡ふあい...♡」
「...安彦さん。わたしと彼がエッチするところ、ちゃんと見ていてください♡」



「はひあ…ああっ♡あむ、ちゆる♡
んっ…んっ♡んぶっ！」

「はあっ♡はあっ♡ごめんなさい。
私、ぜんぜん慣れてなくて……」

「あれ？旦那さんとはこういうキスはしないの？」

「は、はい…。普通の触れ合うキスはたくさん
してますけど。その、こうやって舌を絡めあう
のは……」

んっ♡んっ♡

んっ♡んっ♡

んっ♡んっ♡

「そっかそっか、それじゃあ旦那さんの
為にもここで慣れておかないとね」

「ほら、奥さん。相手の舌の動きに
合わせて絡めあうんだよ」

「んっ♡れろ、ぢゅぷ♡んはあ♡はあっ♡
こう、れふかあ?.....ぢゅ、ぷぷ♡♡」

「そう、上手上手♪」

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

んっ♡
んっ♡
んっ♡







「ほら、もっと俺の舌を受け入れて、
気持ちよくなっているところ
旦那さんに見せて上げないと」

「は、い……っ♡はむっ♡ぢゅぷ、ぢゅぶっ♡
じゅる♡んふう♡んっ♡う♡はあ……っ♡」



上品で恥ずかしがりやな妻があんな貪るような
キスをするのを初めてみた。

俺とするときには唇が触れ合うだけでも
顔を真っ赤にさせ恥ずかしがっていた
というのに……。

妻の初めて見せるその一面に悔しさと苦しさを
覚えるも速く続きが見たいと俺は食い入るように
画面に魅入っていた。





「ひうつ♡はあつ♡あ、ああつ♡ま、待っていきなり、はげしくされ、たら…♡…♡んひいつ♡はあつ♡ああつ♡」

「ああ、ダメだよ逃げちゃ。初めて会った男のチンポでよがっているところ旦那さんに見せつけてあげないと♡」

あゝ

ハッハッハッ

ハッハッハッ

たのし

あゝあゝ

アッアッ

どッ

「はあつ♡ああつ♡そん、な…♡♡お、おおお…♡は、あつ♡ああつ♡」

ん♡

「うほお♥人妻の開発済みマンコ気持ちいいっ♥
こんなエロイ奥さんを他人に抱かせるなんて
旦那さん、そうとうキまっていますね♥」

「くぅ…っ♥は、あっ♥んあ、あっ♥
お、夫のことを悪く言わないで
くだ、さい…っ♥」

どっ

アッ
アッ

アッ
アッ

あッ
あッ

あッ
あッ

あッ
あッ
はっ♥
たっ♥

「はひい♥はあっ♥はあ♥う…っ♥
あ、ああっ♥んああ、あああっ♥」

んっ♥
んっ♥

「そんなこと言って本当は楽しんでるでしょ。
その、証拠にオマンコもキュンキュンって
締め付けて来てますよ♥」

「旦那さん公認の浮気セックスだからって
こんなに興奮しちゃって、エッチな
奥さんだなあ♥」

あぁあぁ
あぁあぁ

たっ
たっ

「おひいっ♥はあ♥あ…んあ、あっ♥
だ、だって…っ♥オマンコ気持ちよくって
体が勝手に感じちゃうんです…っ♥」





「はあっ♡はあっ♡め、恵……っ!」

俺では届くことの出来ないであろう膣奥を
男の肉棒が激しく突き上げる。

感じているのにそれを必死に耐えている
妻のその顔は快楽に浸った雌そのものだった。





「おらおらっ！旦那さんの形忘れるくらい俺ので広げて上げますよっ！」

「んうっ♡ああっ♡はあっ♡だ、め…っ♡子宮、降りてきちゃう…っ♡」

「はひい♡安彦さんのじゃないのに…っ♡身体が受け入れようとしちゃってるよお♡」

あぁあぁ

あぁあぁ

たのしみ♡

ん♡

ん♡

あぁあぁ

あぁあぁ

ん♡





「ふう、ふう! くっそ、羨ましいな旦那さん。
こんな極上の雌にいつでも種付けできるなんて」

貪るように腰を打ち付け、妻の膣内を好き勝手に
に決る。その荒々しい動きに彼女はもはや、ろくな
抵抗も出来ずに涎をたらしながらイキ続ける。

あーっ

あーっ

あーっ
はぁっ♡ たーん♡

んっ♡

んっ

あーっ
あーっ

どっ



「っ！ゴム付けているしこのまま出しますよ！」

「……え？あ、はあっ♡あああ、あああああっ♡」

「おらっ！ゴム越しに浮気ザーメンじっかり
味わえよっ！いけっ！旦那以外のチンポで
イキ狂えっ!!」

びゆるっ！びゅぶる、ぶびゆるるるっ！

あッ
んほお
おほお

ん
ん
ん

たろん

も…
ん
ん

ん

「お、おほお♡す…げえ♡なんだこの射精感！
や、っべ……ゴム破けそうなほど出しちゃった」

男は射精しながらも腰をぐりぐりと押し付ける。
その感触を味わわせるたび、妻は身体をビクビクと
震わせ聞いたことのない艶声を漏らしていた。

ビクッ

あああ♡

ビクッ♡

ハァ♡

たろ♡

ハァ♡

ん♡



「あむっ♡じゆる♡んぶう♡ちろちろ♡
ちゆる…んぐっ♡ちゅぶ…ちゅっ♡」

「お、おおっ、奥さん、ちんぽの扱い上手すぎでしょ…っ♡
うほおっ♡口窄められながら舌先でチロチロされるの
気持ちいい…っ♡んおお♡」

「ちゆる、ちゅっ♡んぶ♡はむ、れろれろ…んぶっ♡
はあ…はあ♡…ぺろ♡じゅぶ、ちゆる…ちゆるるっ♡」

どっ

あ…
はあ♡

うっ
うっ

んん

くっ
くっ

んん

むに

くっ
くっ



「ちゅぷ…っ♡はあ、はあ♡ん…っ♡」

「…あ、あのね、これは彼に気持ちよくしてくれたおちんぼ様にはお礼をしなくちゃダメだって言われて、それで…っ♡」

「ほら、休んでちゃ、ダメですよ。もっと舌を使ってお掃除しないと」

どろろ

あゝ♡
はあ♡

ハァ♡
ハァ♡

ブルん

むに



「んっ♡は、い…♡んぶっ、うぶっ♡
じゅぶ♡れろれろ、ちゅぶぶっ♡」

「くうっ♡今まで何人ともやって来たけど
こんな嬉しそうにチンポ舐める女は初めてだよ」

どっ

あ…♡
はあ♡♡

ハ…♡
ハ…♡♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ぶっ♡

むに



「ふう♡んぷぷっ♡…んぐっ♡じゅるるっ♡」

「…うっ♡ふう、ふう…っ♡吸い付き強すぎて
チンポ持っていかれそうだった♡はあぁっ♡」

「もう、むり…っ…このまま口の中に出すぞ！」

びゅぶっ…びゅびゅ、びゅぶぶっ…っ！

どっ

んっ♡

っ♡

ブルん

おに

びゅ
びゅ

んっ♡

ふぬっ♡

「お、おおおっ♡舌絡ませながら奥まで…っ♡
ふあっ♡あああ♡尿道に残っているの吸い
取られるの気持ちいいっ♡」

「はあ〜っ♡さい、こう……っ♡
旦那さん、本当にありがとうございました。
貴方の奥さん最高でしたよ」

んんん

おに

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん



はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡

はあ♡

「私のエッチな動画でいっぱい
シコシコしてくれると嬉しいです♡」

「…ん、ふっ♡んぐ、ごく…ごくっ♡
はあ、はあ♡……あ、あはは♡どうでした？
安彦さん。楽しんでくれましたか？」

はあ♡

はあ♡

「……おっと、それじゃあ。ここからは
プライベートタイムなんで動画は
ここまでにしますね」

「……え？い、いや、あの……っ!」

「大丈夫、大丈夫。旦那さんの趣味なら
こっつうのも喜んでくれるからさ」

どろろ

あゝ
はあ♡

うー
うー

はあ♡

く
く

ぶるん

むに



「……っ！はあ、はあ……っ、うぐっ！」

情報の有無はもつとも重要なことだ。

現に、この動画に映っているのがただの赤の他人ならば普通に興奮することしか出来ない。

だが愛する妻が自分以外に見せている痴態という情報が追加されるだけで気が狂ってしまいそうなほど興奮してしまうのだ。



頭の中はぐちゃぐちゃになり。
胸が痛く、心臓はバクバクと飛び跳ねる。

こんなにも苦しいというのに股間のイチモツは嫌になるほど硬くそり立ち。

一度も触れていないというのにズボンの中で生暖かなものを吐き出し果ててしまっていた。

「あは♡すごい…♡いつもより
いっぱい出しちゃってますね♡」

「私が他人に抱かれるのを見て
本当にこんなにしてくれたんだあ
ふふ…嬉しいです♡」

「う、あ…っ、恵っ」



動画に夢中になりすぎて気付かなかったが
いつの間にか風呂から上がっていた妻が
あの男に渡された下着姿で俺の前に立っていた。

「動画はここで終わっちゃってますけど
この後も、私いっぱいされちゃったんですよ♡」

「結局ゴムも使い切っちゃって…」

「……っ」



「それなのに彼ってば、まだまだ
したりないって言ってきた…♡
ふふ♡その後どうしたと思います？」

「も、もしかしてそのまま、中で……っ」

「残念でした♡生エッチはしていませんよ？
ああ…♡そんな悲しそうな顔しないで下さい」

「……安彦さんはどうしても、ゴムを付けさせないで他の人とエッチして欲しいんですか？」

「私のお腹の中にあなた以外の不貞の種を出させて、びちびち元氣いっぱい精子を泳がしたいんですね♡」



「でもそんなことしたら避妊薬を飲んでいても赤ちゃんが出来ちゃうかもしれないんですよ？」

「それでも安彦さんが望むなら私は……」

「お、俺は……俺はっ！」

「ふふ♡困らせちゃいましたかね♡」

「ん……♡大丈夫、安心して下さい。
貴方が喜んでくれるなら、私は
なんだって出来るんですから♡」

俺の答えを聞かずともすべてわかっていると
言わんばかりに慈愛に満ちた微笑みを浮かべ
彼女は優しく唇を重ねてくれた。



「悪いな英寿。せっかく遊びに来てくれたのに構ってやれなくなつて。本当は色んなところに連れてってやりたかったんだけどな」

「ううん。お仕事ならしょうがないって叔父さん」



甥っ子が泊りがけで遊びに来るのは前から決まっていたことだ。だがタイミングの悪いことに俺は急な出張で二週間も家を留守にすることになってしまったのだ。

本当になんてタイミングが悪く。そして都合がいいのだろうか。

こんな時の為に妻と一緒に仕掛けた
隠しカメラがさっそく役に立つとは……。

俺は内心ほくそ笑みながら後のことを
妻に任せることにした。



「うん、そうか。…でも。やりたいことや
したいことがあったら恵みに言っでやってくれ」

「俺が何もできない分、しっかり面倒を見るように
言っであるからさ……な、恵」

俺はそう言うと言望のこもった瞳で彼女を見つめる。

恵は困った人ですねと言いたげな苦笑を浮かべながらも、頷き俺の耳元でそっと囁く。

『期待しててくださいねと……』



その艶やかな言葉を聞いて射精しなかったのは我ながら褒めてやりたいくらいだ。

俺は妻の言葉に背を押され、帰って来た時のことを考えながら軽やかな足取りで出かけた。

「ごめんなさい。連休は前からこっちに来るって約束してたのに急にこんな事になってしまっで」

「いいいんですよ。そもそも迷惑をかけているのは僕の方なんだし」

「それに叔父さんは社会人なんだからこういう事だってありますよ」



「そう言ってもらえるのは有難いんですけど…」

「せっかく安彦さんに貴方のこと頼まれたのに、私じゃ車の免許も持っていないから楽しそうなところに連れてっても上げられないんですよね」

「だから、というわけではないのですけど……♡」

「この二週間は外に行くよりも、もっと楽しくて気持ちいいことを教えてあげますね♡」

「……え？」



彼の耳元で湿った艶やかな声で囁く。

甘ったるい雰囲気を感じ、いけない遊びに誘うように。

顔を真っ赤にさせながら彼はビクリと背筋を震わせる。

同時にその股間が膨らんでいるのを私は見逃さず。ゆっくりと焦らすような手つきで彼のそれに指を這わせた。

「んっ♡おちんちん、ちよつと触っただけで
ビクビクって震えてる♡もしかして女の人に
こーやって触られるの初めてなんですか？」

「う……っ。は、はい。そ、それに……その。僕、女の子と付き合ったこともなくて」

「そっかあ♥それじゃあ好きな人ができる前の予行練習をしてあげなくちゃいけませんね♥」

ひんげん

77



私は彼の反応を見ながらカウパーを指に絡め、それを潤滑油に亀頭の先を撫でまわす

ゆっくりと焦らすように触っていたつもりだが
どうやら、その刺激だけでも彼には強すぎたようだ。

手の中のおちんちんは直ぐにでも暴発して
しまいそうなほど震えている。

んっ...



「はうっ♥め、恵、さんっ♥そんなに先っぽ
ばっかり弄られたら、僕……っ♥」

「いいんですよ、もっと素直に快感にしたがって
イキたくなったら、そのまま手の中で
どぴゅどぴゅって、お漏らしてくださいね♥」

んっ…

うっ…

うっ…

びゅっ

びゅっ

「……っ！そんな、こと言われたら…っ！
はあ、あ、あ♥あ、あああ……っ♥
もう、出ちやいます…めぐみ、さんっ♥」

びゅぶ、びゅる、びゅるるるるっ！

「うわあ…♥すっごい♥私の手でこんなに出して
くれたんですね♥んっ♥若いってすごいなあ♥
あの人の倍以上出しているのにまだこんなに
元気なんですもん」

www

A collection of pink doodles including several hearts and arrows, some pointing upwards and others downwards, scattered across the page.

777

どいっ

人妻人妻

「あ、あのっ♥僕まだ……っ」

「ふふ♥もっと気持ちいいこと
したそうな顔ですね♥」

「……でも駄目ですよ♥
今日は手だけでおしまいです♥」

ん……

ググググ

ググググ

ビュッ

ググググ



「二日で全部出しきっちゃたら
楽しみが減ちやいますから」

「明日はもっとすごいのをしてあげますから期待して待っていてくださいね♡」

そう彼の耳元でささやくと壊れた玩具のように首をぶんぶんと縦に振る。

どうやらわずかにでも感じていた自分の叔父への
罪悪感などもう忘れてしまっているのだろう。

だが、年頃の子が二度枷を外してしまったら
こうなってしまうのは仕方がないこと
なのかもしれない

んっ...

うっ...

んっ...

びゅん

まあ、こんな悪いことに少年を利用している
私たちには何もいう資格はないが。

せめてこの子には夫が帰ってくるまでの二週間で
素敵な夢にしてあげよう。自分たちの異常な行為に
巻き込んでしまっていることへのせめてもの
罪滅ぼしに。

「んふふ…♡おちんちん、おっぱいで挟んじやい
ました♡こーやってグニグニされるのも気持ち
いいですね♡」

「英寿くんたちの年齢の子じゃこういうことは
あんまり出来なさそうだから、今日はこれで
いっぱい楽しんでくださいね♡」





むにむにと擦り合わせた胸が形を変えながら
おちんちんを刺激する。

快楽に耐性のない彼はガクガクと腰を
震わせるも、直ぐに出さないようにと
手を握りしめ、必死に耐えていた。

そんな様子を微笑ましく思いながらも刺激を
与えるのを止めず、むしろ射精を促すように
動きを激しくする。

あゝ
はあ♡

むに
むに

ムンムン
たろん♡

ビーン♡
ビーン♡

う...あ

ビーン



「は、ああっ♡英寿くんのおっつい、おちんちん元氣いっぱいでおっぱい火傷しちやいそうです」

「ん、あつ♡それに血管がおっぱいの中で
びくびくって脈打って…っ♡何だか私まで
気持ちよくなつてきちゃいました♡」

「だ、だって……っ♡恵さんのおっぱいが
柔らかくて吸い付いてくるから……っ♡
おちんちんおつきくなっちゃうんだもん♡」

はあ、
あ、
♡

むにむに

たのしみ♡

う...あ

七



「はあ、はあ…っ♥あああ…っ♥ぼく…もう、
でちゃう…っ♥はう♥ああ♥このまま
おっぱいの中に出したいよ…っ♥」

「…はい♥いいですよ♥
私のおっぱいの中でどぴゅどぴゅ
気持ちよく、射精しちゃってくださいね♥」

あゝ
はあ♥

ハ〜♥
ハ〜♥

むに
むに

ムンムン
ムンムン

ビュ♥
ビュ♥

う…あ



1



9

「恵さん！恵さんっ！」

「もう…♡焦らなくても私は逃げませんよ♡
……うん♡そう、その穴。そこに英寿くんのが入るんです…♡」

「ほら、私のオマンコ、おちんちん欲しいって
もう、トロトロになっちゃってますから
何の遠慮もいりませんよ♡」

はあ…
はあ…

んっ…
ドキ
ドキ

ムムム

フー

あ
あ

ズ
ズ
ズ



この日は焦らしに焦らして夜を迎えた後、
彼と手をつなぎながら夫婦の寝室へと
向かい入れる。

何も言わずともこれからすることを分かって
いたのだろう。私がベットに腰を掛けると
息を荒くしたまま直ぐさま覆いかぶさってきた。

はあ...
はあ...

あッ

ムムム

アッ
アッ

ズッ
ズッ



「ひぎゅっ♥お、おおっ♥オマンコの中で
ニユルニユル絡みついてきて…っ♥はぐうっ♥」

「はあ、ああ♥恵さんのトロふわオマンコ
あ、あうっ♥気持ちいいの止まらない…っ♥
腰がへこへこ動いちゃう…っ♥」

「ひあ♥あう…あ、あんっ♥おっぱいに顔をうずめて
ズポズポするのそんなに、好きなんですか♥」

「はあ♥はあ♥あんっ♥生オマンコが
気持ちいいからって張り切りすぎですよ♥」

ふぬっ

ムンムン

ズッ
ズッ
ズッ





「あ、あああつ！だってオマンコの中
気持ちよすぎて蕩けちゃいそうなんだもん♡」

「お、おおほおつ♡これ、パンパンしてないと
おちんちんがあるのか分からなくなつちやうのお」

「ふはあつ♡あ、あああつ♡もっと、もっと
おまんこじゅぽじゅぽして恵さんのお腹の
奥に全部出すのお！」

はあ...
はあ...

ん...

ムムム

ズンズン



「も♡しょうがない子ですね♡本当なら
夫婦や恋人でもないのに生オマンコ貸して
くれる人なんていないんですよ」
「その年で生の味覚えちゃったら
絶対苦労しちゃうんですから」

はあ...
はあ...

ムムムム

ズッ
ズッ
ズッ



まるで私の身体のことなど考えていない本能のまま。
ただ自分が気持ちよくなるためだけの腰使い。
その荒々しさにこの年でも彼は既に雄なのだと
理解させられてしまう。



「ふう、ふうっ！う、くうっ♡
めぐみ、さんっ♡ぼく、もう……っ♡」

「あんっ♡んう…っ♡…もう♡こっちにいる
間だけの特別、なんですからね♡」

「……いまだけ、責任とか何も考えないで
気持ちよくなるためだけにオマンコに
どぴゅどぴゅ射精していいですよ♡」

はあ…
はあ…

あば

うーっ

ムムム

ズズ

ズズ



「……うっ！」

「く……うっ♡ほあ♡あ、ああ♡お、おほお……♡
おまんこにおちんちん搾り取られるう……♡」

「んうっ♡英寿くんの精子、奥まで届いちゃってる♡
ああ♡んはあ♡子宮の中でびちびち泳いでるの
伝わちゃう……♡」

はあ……
はあ……

あッ

ムムム

アッ
アッ



「ぐうっ♡はあ、はあ…っ♡
恵さん、好きっ♡好き好き…っ♡」

「あんっ♡もおゝ、ごんな年上に
そんなこと言っちゃダメですよ♡」

「此処にいる間は満足するまで好きなだけさせて
あげますから。お家に帰ったら、もっと年の近い
彼女を作れるように頑張ってくださいね♡」

「ううう…っはだって、だって！」

はあ…
はあ…

ん…

うー

ムムム

あゝ
あゝ

ひる
ひる

うー

射精しながらも、まるで自分の物だとも言いたげにぐりぐりと腰を押し付けてくる。安彦さんに似た顔で迫られ少しドキリとしてしまったのは内緒だ。

流石親戚といったところか、まるで若いころの彼とエッチをしているみたいで私の方まで興奮していた。

こんな状態で残りの日数を過ごしたら私はいったい、どうなってしまうのだろうか。

そしてなによりも、それを世界で一番愛おしい人に見られると思うだけで私の身体はひどく疼いてしまうのだった。

ふぬふぬ

んっ...

ムムム

アッ
アッ

アッ
アッ



「た、ただいま、恵っ!」

「はい♥おかえりなさい、安彦さん♥
……っで、シャツが汗でビショビショですよ」

「もおゝ♥そんなに急いで帰ってきて、
どれだけ楽しみにしていたんですか?」

「慌てなくても二週間。たっぷりお世話した分の
記録はちゃんと撮ってありますから♥」

「……っ!う、うん。そう、か」



「ただあの子にはちよつと悪いこと

しちゃいましたね。いくら避妊をしているからって
女の生の感触を覚えさせちゃいましたから」

「これから先、彼女を作ってもあの時の私の
感触を思い出して…もう、簡単には満足出来なく
なっちゃったかも知れないですからね♥」

くすくすと妖艶に微笑む彼女の顔が美しく。
俺のイチモツはこの家でナニがあつたのかを
想像しただけで痛いほどに勃起してしまった。



「……あっ♡」

「う……っ♡」「めんっ……、これはその……」

「やっぱり、こういうので安彦さんは喜んでくれるんですね♡分かっていても嬉しいです♡私のことを考えてそんなにしてくれたんですから♡」

「ふふ♡いっぱい頑張って良かったあ♡」



「……うん。ありがとう恵」

肩に頭を預け、寄りかかる恵。その腰に手をまわし、俺たちは離れていた時間を取り戻すように寄り添い、寝室へと向かう。

（さて、一週間分の記録か……。これは長い夜になりそうだな♡）

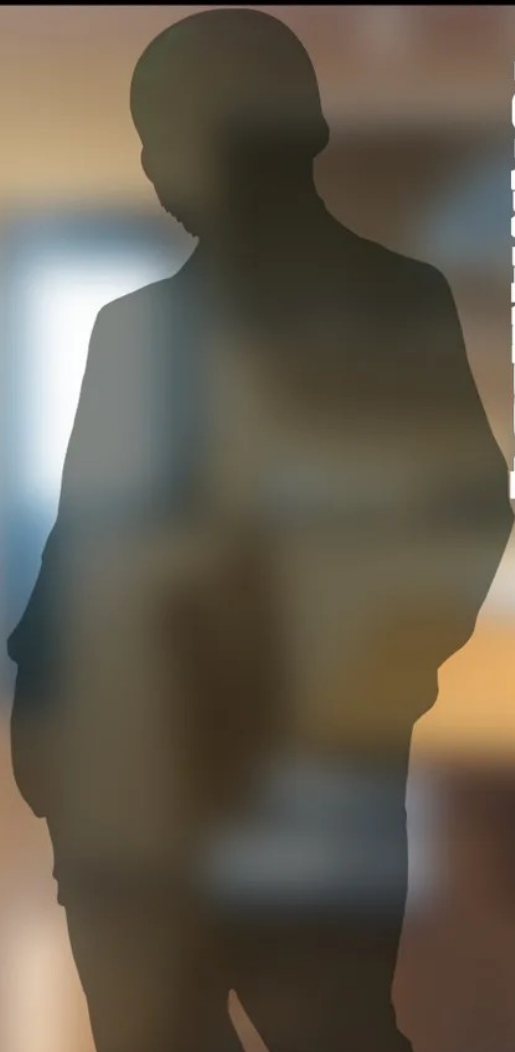
「いやあ、すまん安彦に恵さん。
わざわざ様子を見に来てくれただけ
じゃなく、飯まで作ってもらって」

「何言ってるんだよ父さん。
親子なんだからこんなの当たり前だろ」

「それに母さんが亡くなってから、ずっと男やもめ
だったんだ。偶にはこうやって自分以外の作った
ものも食べた方がいいよ」

「家も近いんだしこれからはもつと顔を見せる
ようにするからさ。それに俺がいないときには
恵が来て世話をしてくれるって言ってくれたんだ」

「あ、はは♥……はい。私に出来る事なら
何でも仰ってくださいね♥」



今の言葉はもちろん嘘ではない。
ただしまだ、本当のことも言っていないが。

そう、俺たちが実家に顔を見せに来たのには理由がある。
それは都合がよく。それでいて安心して妻を抱かせられる
相手を求めていることだった。

その為に自身の父親に話を持ち掛けに来たのだ。



俺だって妻を抱かせるのは誰でも良いという
わけじゃない。

乱暴そうな相手や素性が分からなすぎる奴。
これがプレイだと言っておいたのに本気で
妻に懸想しそうな男。

兎にも角にもそんな奴らばっかりなのだ。

「……なあ、父さん。少し二人っきりで話したいことがあるから、後で部屋に行ってもいいかな？」

「お、なんだなんだ。夫婦のことで相談事か？」

「これでも父さんは充実した夫婦生活を送っていたからな、何か心配事があるのなら何でも相談に乗るぞ！」

「あはは、さすが父さん。頼もしいや」



——そして悩んでいるうちに、ふと思いついた。

母さんが亡くなってから一人寂しく過ごしている
父さんなら恵の相手として、何の不都合もないんじゃないかと。

父さんなら暴力も振るわないだろうし身元も
問題ない。なんたって俺の実の父親なのだから。



それに避妊していても妊娠するリスクはあるのだ。
もしもが起きても血のつながりのある相手なら
まだ納得できるかも知れない。

そんな期待と不安を相反させながら、
俺は自分の父親に愛する妻を抱いてくれと
頭を下げに行くのだった。

「何でも相談してくれとは言ったが。」

「まさか二人がこんな事をしているとはな」

「なあ、恵さん。お互い、こんな格好で」

「言うのも今更なのだが。本当にいいのかね？」

「はい♥それが夫である安彦さんの頼みですから♥
それに私はあの人が喜んでくれるのが一番の
幸せなんです♥」



「う、うむ。とはいってもね」

「……もしかしてお義父様にとって私は
女としての魅力を感じませんか？」

「そ、そんなことはないぞ！
その、凄く魅力的だよ」

「あはっ♡良かったお義父様にも喜んでもらえて」

「……恵さん」

「ふふ♡まだ触ってもいけないのにおちんぽガチガチにさせちやつてますね♡それに、すごいエッチな目ですよ♡」

「どうぞ、お義父様…♡息子嫁の生おまんこいっぱい堪能してください♡」



「お、おとおつり！これは、なんとという名器…っ！
くうっ！私も若いころそこそこ遊んでいたが
こんな贅肉初めてだぞ…っ！」

おに
おに



ふんふん

な...
は...
は...



「んふっ♡あはあ♡どう、ですかお義父様♡
ふあっ♡あ、ああ…っ♡はあ♡わたし…ちゃんと
気持ちよく、させて上げられてるでしょうか？」

「ふう、ふう…っ！ああ、最高だよ。
こんな男を搾り取るように
絡みつくマンコがあるなんて…」

はふっ♡
はふっ♡

おに
おに

はふっ♡
はふっ♡

はふっ♡
はふっ♡



「私ももう若くないが、こんなにいやらしく
求められたら我慢出来なくなってしまうよ」

「あはあ♥はいっ♥構いませんよ♥

私のオマンコお義父様の性処理道具として
いつでも好きに使ってくださいね♥」

はふ...はふ...♥

おに
おに

どっ

はふ...はふ...♥

はふ...はふ...♥

んん♥

うん...うん...

はふ...はふ...♥

はふ...はふ...♥

「おほおっ♥んぎゅっ…♥お、おおおっ♥
あ、ああっ♥いち、ばん、おう…っ♥
どちゅどちゅ突き上げられて…んひいっ♥」

「ふあっ♥ああっ♥亀頭でぐりぐりって
子宮口にキスされちゃってるっ♥」

はふふふ

おに
おに

うん
うん

「はあっ♥あ、ああっ♥どうしよう…っ♥
このおちんぽもつと欲しいっておまんこ
疼いてきちゃうよお♥」

ズン
ズン

ん
ん

「んい♥や、あ♥おまんこからエッチな音
させちゃって…っ♥ふあっ♥あ、ああああ♥
子宮が好き好きって勝手に降りてきちゃってる」

「はうっ♥はあっ♥お義父様…お義父様あ…っ♥」

優しくいやらしい腰の動きから、急な動きの変化に
私は嬌声を上げながら背筋を仰け反らせてしまう。





「...くうっ！もう、でてしまいそうだ...っ！
いいんだね、このまま中に出しても」

「あひっ♡は、あ♡は、い...っ♡お義父様の
優秀な子種、私の中に全部注いでくだ、さい...っ♡」

「...っ！」

おに
おに

おに
おに

おに
おに

おに
おに

びゅぶ、びゆる、びゆるるるっ！

「んあ、あああっ♡これ、すっ」…っ♡はあっ♡
はあ…っ♡濃厚ザーメンどぶどぶ注がれてる…っ♡
ああっ♡ふひい…♡多すぎて溢れて来ちゃってる♡」

「……あうっ♡こんなに濃いの中に出され続けたら
ピル飲んでるのに妊娠しちやいそうですよ♡」

びゅぶ
びゅぶ

んあ
んあ

んあ
んあ

んあ
んあ

んあ
んあ

んあ
んあ

んあ
んあ

んあ
んあ





「はあ…はあ♥んくつ♥お義父様、私たちの無理な
お願いを聞いてくださってありがとうございます♥」

「ははっ、なに、私の方こそ良い思いをさせてもらったよ」

「ふふ♥喜んでもらえたなら良かったです♥
これからも、またお願いしますね、お義父様♥」

「はうつ♡あああ♡ダメ…なのにつ♡
そんなに子宮口虐められたら身体が
このおちんぽ好きになっちゃう♡」

「おひつ♡はう♡ん、ああ♡
お義父様とのセックス気持ちよすぎて
癖になっちゃいそう…♡」

はん♡

はん♡

はん♡

はん♡

はん♡

はん♡



少しでも自分のペースを掴もうと騎乗位で挑んでみたが、いつも通りに翻弄されてしまう。

お義父様と繰り返しするようになってきたがその歳からは想像も出来ないほどの性欲でいつも、振り返ちにあっってしまうのだ。





「お、おおっ♡ほおっ♡んおお…っ♡」

「わたし、安彦さんのお嫁さんなのに…っ♡
おほおっ♡お、おほお♡か、身体は、お義父様の
モノだってわからせられちゃう…っ♡」

はぁん♡

はぁん♡



「……っ！イクぞ、恵さん！
このまま、息子嫁のどすけべオマンコに
私のザーメン全部叩き付けてやるからな！」

「ああっ♡躡けられちゃう♡私の大事なこと♡お義父様のモノだって覚えさせられちゃう…っ♡」



「はあ、やあ…っ♡中だし、きたあ♡はうっ♡
ああっ♡イク♡イクくうううううくっ♡」

「ん、ひい♡ん…っ♡お義父様の熱々ザーメン、私を
孕ませようとしちゃってる♡はひい♡あ、ああっ♡
お薬飲んでるのに卵子が屈服したがってるの♡」

はあ

あ

あ

あ

あ

あ

あ







「ひぎゅっ♡お、おほおほっ♡」

だがその考えは甘かった。

いまのお義父様はまるで興奮しきった獣のように私を求め、いつもよりも更に肉棒を硬く脈打たせながら膣内を蹂躞する。

まるで私の身体から自分以外の痕跡を消すかのように。



「はぁ♡はぁ♡あう...♡お義父...様♡
そんな、唾液を流しこまないで...♡」

「んぶ♡ちゅぶ♡れろ♡ちゅぶぶ♡ふう♡ふう♡
ん、んん♡う...♡んく...んぐ♡く♡じゅぶ...♡」

ん...ん...ん...

んぶ♡ちゅぶ♡れろ♡ちゅぶぶ♡ふう♡ふう♡

ん...ん...ん...♡んく...んぐ♡く♡じゅぶ...♡



「私の中、お義父様で満たされちゃう…♡
このままイカされたら…身体が勘違いしたまま
もう、もどれなくなっちゃうよぉ♡んう…♡」
「ああ、望むところだ！むしろそうしてやる！
くうっ！イクぞ！出すぞ！恵さんの中に出して
やるからな！」

はぁ♡

ハァ♡ハァ♡ハァ♡

んっ♡んっ♡んっ♡

ブルン

ビッ

ハッ！ハッ！

アッ！アッ！



「ひっ！う、あつ！なに、言つて...っ。
あ、ああつ♡だ、ダメっ、お義父様ぬい、てっ！」
「なに、心配することはないさ。私は安彦の父親だ。
遺伝子の半分が同じなら出来た赤ん坊はあいつの
子供のようなもの。だから安心して孕みなさい」
「そ、そういうことじゃなくて...っ！」





「お、おおお…っ♡ほおおっ♡子宮の奥に
ビチャビチャって広がってる…う♡」

「あっ♡ん、あああっ♡お、お義父様の精液
卵子に群がって赤ちゃん作ろうとしちゃってる♡」

「ひぎゅっ♡ふ、ああっ♡あ、こん、なの…っ♡
もう、プレイじゃなくなっちゃうよお♡」

ビッ
びる
びる

びる♡

びるん

ん…

ハァハァ♡

はあ♡

びる♡

びる

今日も妻の帰りは遅い。

恐らくは父さんのところに行っているであろう。

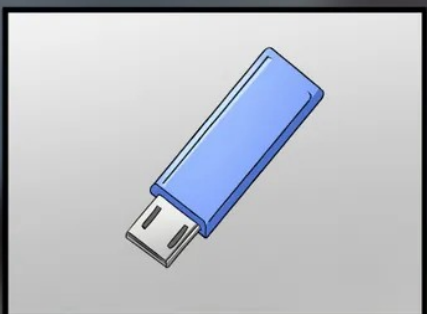
最近は帰りが遅くなることが頻発していたが
今日はそれに比べても殊の外遅い。

自分から言い出したことなのに妻との時間が
取れなくなっただけで来ていることに焦燥感を感じてしまう。

そんなことを考えながら着替えていると、ふと目の端に見慣れたフラッシュメモリが置いてあるのに気づいた。

これは前にも使ったことのあるものだ。

父さんとしているときの動画が入っているのだろうか？……わからないがこれがココに置いてあるということは見るとどの妻からのメッセージなのだろう。



——ゴクリと自分の度が鳴ったのが分かる。
俺は何故か不安と緊張を覚えながらも動画を再生させた。

● REC

「はあ、はあ♡んっ♡あう…♡あんなにいいっぱい出したのに…♡お義父様のザーメン、濃厚すぎて子宮にへばり付きちゃって全然零れてこないですよ♡」
「…っら、恵さん。もう撮り始めてるから安彦に報告しないと」

「は…いい♡見えますか安彦さん？」
「えへへ♡私の中お義父様のザーメンでマーキングされちゃいましたあ♡」



● REC

「それと大事な報告があります♡」
「あのですね、実は私…今日はまだ
お薬飲んでないんです♡」



● REC

「……ごめんね♡」

「貴方だけの特別、お義父様に許しちゃいました♡」

「お義父様にどうしても避妊なしでしたいって
言われちゃって…。あんな真剣な顔で迫られたら
断り切れなくて……」



何故なんだという考えが頭の奥をぐるぐると廻る。

どんなに他人に抱かれても俺だけを愛してくれた妻はもういないのかと……。

そんな答えの出せない堂々巡りをしているといま二番聞きたく、そして聞かせて欲しくない声に意識を引き戻らされる。



「……あ」

「もう、やっと気づいてくれました。ずっと声を掛けてるのに反応してくれなくて心配したんですよ」

気付くとそこにはいつも通りの妻が立っていた。
動画の中のことなど何もなかったかのよう
に接してくる妻に俺は何も言えなくなってしまう。

そんな、応えることも出来ずに佇む俺に彼女は
何かの錠剤が入った袋を渡してきた。



「帰るのが遅くなってごめんなさい。
……これが必要になるかもしれないから
薬局で貰ってきたんです」

そう言って妻が渡してきた錠剤に目をやる。

——緊急避妊薬。別名アフターピルというものだ。



「ねえ、知っていますか安彦さん。アフタービルって三日以内に飲めば有効なんだそうですよ」

「それで、ですね……。さっきまで見ていた動画あれを撮ったのは、二日前でまだ時間があるんです」



「……ねえ、安彦さんはどうして欲しいですか」

「貴方が欲しいのは自分の血を分けた実子？
それとも、お義父様のつよつよオチンポで
できるかも知れない新しい弟妹？」

「あ、ああ…っ！た、頼む。頼むから…っ！」

胸を締め付ける苦しさと頭の奥をぐちゃぐちゃに
してしまうほどの多好感に同時に襲われ、喉が詰まっ
てしま
い
これ以上の言葉を出せなかった。

「ふふ♥大丈夫ですよ。それ以上言わなくても♥
貴方の『その顔』を見れば。して欲しいことなんて
丸分かりです♥」



「……安心してください。何があっても私が愛して
いるのは安彦さんだけです。だから貴方が『望まない』
ことは絶対にしませんから♥」

彼女は縋りつき「ごめん」と繰り返して泣きつく俺を
慈愛に満ちた声で落ち着かせてくれる。

動画を見て自分のせいで彼女が変わって
しまったと思っていた……だが違うのだ。

彼女は変わってなどいなかった。

徹頭徹尾、全ては俺を喜ばすためにやってくれた
だけだったのだ。



その深い愛に。まるで執着すら超えたそれに抱き
しめられながら、俺は絶対の安心感に身をゆだねる。

どれだけ他人に歪だと……普通ではないと
言われても、俺と妻はこれで良いのだから。